

ポジショナリティの混乱と「対話」ならびに「政治」の可能性：沖縄と日本の事例から

著者名(日)	池田 緑
雑誌名	大妻女子大学紀要. 社会情報系, 社会情報学研究
巻	24
ページ	13-32
発行年	2015
URL	http://id.nii.ac.jp/1114/00006129/



ポジショナリティの混乱と「対話」ならびに「政治」の可能性

—沖縄と日本の事例から—

池田 緑*

要 約

植民地主義的關係において、ポジショナリティとアイデンティティの混同がしばしば起こる。この混同は、ポジショナリティと「属性反応的アイデンティティ」との混同と、「属性反応的アイデンティティ」と「能動選択的アイデンティティ」との混同という、二重の混同を引き起こす。このような混同は、共同体内の秩序の再編成である「ポリス」と、共同体外部からの介入である「政治」という、ジャック・ランシエール概念を用いて理論化が可能である。同時に、ランシエールの「不和」という概念を用いて、ポジショナリティを基盤とした新たな「ポリス」の秩序の再編成の可能性を指摘する。本稿では以上のことを、沖縄と日本の事例をもとに検討する。

1. お詫びと問題設定

1-1. 誤引用のお詫び

昨年度の本紀要に掲載された、私が執筆した論文「沖縄と日本における社会意識のポリテクス—“平和”言説を中心に—」において、引用箇所を誤りがあった。最初に、その点について訂正とお詫びをしたい。

沖縄の基地問題をめぐり、ポジショナリティとアイデンティティの錯視を検討する議論の中で、仲村清司氏と宮台真司氏の対談を引用したが、そこでの仲村氏の発言を宮台氏の発言と取り違えて立論するというミスをした。以下の線で囲まれた部分はその該当箇所である。

以下は、大阪生まれの沖縄人二世の仲村清司と日本人宮台真司の対談の一部である。このなかで宮台は、「状況が煮詰まったときに登場する琉球独立論」に触れた文脈において、それらは「往々にして歴史的怨恨に根ざした過激な反ヤマト感情を拡大再生産」するものだとしたうえで、以下のように述べている。

— (略) —反基地集会や闘争現場では沖縄人とヤマトンチュを血で線引きし、市民運動に参加している他府県出身者に「ヤマトンチュはヤマトに帰れ!」「加害者のクセしてウナンチュづらするな!」「よそから来たバカ者」とネトウヨと変わりない言葉を浴びせる人たちもいます。

*大妻女子大学 社会情報学部

敵と味方の区別もつかず、あらゆるヤマトンチュを十把一絡げして、「ナイチャーは帰れ」といった感情むき出しの言葉を浴びせかけたところで、語りあえるものは何もあります。あるいはもっといえば沖縄に内在する問題を背景化させて、民族的アイデンティティのみを前景化させるやり方は民族的他者を排外する危険性を生み出すおそれもあります。(仲村・宮台, 2014: 116)

この宮台の発言は、私がこれまでに仄聞してきた「現実の闘争現場」の様相とはいささか異なっている。人員も資源も少ない反基地運動においては、日本人であっても貴重な“戦力”として歓迎されることも珍しくはないと聞く。少なくとも、最初からいきなり「血で線引き」され、罵詈雑言を浴びせかけられるという話は聞いたことがない。同様に、ただ日本人であるという理由一点によって、引用文のような激しい言葉が投げつけられるとも、にわかには信じられない。

ときには、「沖縄にやってきて運動をするのではなく、基地負担を強めている“日本”に戻って、日本人に向けて運動をするべきだ」という文脈において、「日本に帰れ」という主旨の発言がなされることはあるだろう。しかし、それは決して「血で線引き」された日本人の排除などではない。日本人というポジショナリティをみつめ、日本人の責任として、基地負担を強めている日本人に対して状況の変革を訴えるべきであるという、運動への参加の在り方をめぐる対話である。

たとえ引用文で紹介されているような激しい言葉があったとしても、それらのケースは、日本人が自身のポジショナリティに無自覚なまま傍若無人に「ウチナンチュぶら」をして周囲の沖縄人に不快な思いをさせたり、まさに「よそから来たバカ者」と表現するにふさわしいデリカシーを欠いた言動をとっているケースに限られると思われる。ポジショナリティに無自覚な場合、そのような沖縄人の反応が理解できず、

不当に排除されたと感じ、自らが撒いた種の結果としての沖縄人の怒りを、ありもしない「沖縄の排外主義」として自分に都合よく解釈してしまうのである。

宮台によって「ネトウヨ」と同等の一種の「ヘイト・スピーチ」として扱われているこれらの沖縄人による激しい言葉は、そのような発言が本当にあったとしても、決して「敵と味方の区別もつかず、あらゆるヤマトンチュを十把一絡げ」にしてなされたものなどではないと推測する。そのような扱いを受けても致し方のない日本人の行いに対して、正当に発言された真正なものとの解釈可能な場合がほとんどであると思われる。

また宮台は、沖縄人とは「敵と味方の区別」もつかないほどのバカの集まりだとでも考えているのだろうか。誰が敵で誰が味方は、わざわざ日本人である宮台に教えてもらう筋合いのものではなく、沖縄人自身が判断する事柄である。この発言からは、「敵か味方か」は沖縄人ではなく日本人が決定可能な問題であるという宮台自身の日本人としての優越意識と沖縄人への差別意識も感じとれる。

さらに、「民族的アイデンティティのみを前景化させるやり方は民族的他者を排外する危険性を生み出すおそれもある」とする言葉は、ポジショナリティを意識し問題化しようとする沖縄人を、狭量な排外主義的ナショナリストとしてラベリングしようとする、恫喝にも等しいロジックである。このような発言は、沖縄人／日本人というポジショナリティの問題を、沖縄人の民族的アイデンティティの問題にすりかえ、矮小化するものである。なぜこのような発言が日本人の口から平気で飛び出してくるのかを考えると、ポジショナリティの忘却・無視が、権力を持つ側にもたらす効用の大きさが理解できるだろう。

(池田, 2014: 24-25)

ここで私は、大阪出身の沖縄人二世である仲村氏の発言を、日本人である宮台氏の発言と取り違えて議論を行ってしまった。上記文中で引用されている部分＝「(仲村・宮台, 2014: 116)」は、宮台氏の発言ではなく、仲村氏による発言であった。これは私のケアレスミスであり、確認不足によるものである。上記論文掲載紀要の次号に掲載される本稿において、上記引用箇所(線で囲まれた部分)での議論を撤回するとともに、仲村・宮台両氏に対して、発言者取り違えという、うっかりミスに基づく議論を行ってしまったことを謝りたい。とくに宮台氏に対しては、発言者の取り違えに基づいた批判を行ったことを、心よりお詫びする。

1-2. 本稿の問題設定

このミスは、上記の論文が公刊された後、別稿を準備中に気がついた。ありうべからざる単純なミスに、自身もショックを受け、相当に落ち込んだ。そして、二度とこのようなミスを犯さないために、なぜこのような取り違えをしてしまったのかを、考えてきた。

その理由は、自分自身の注意不足であることに尽きることはいうまでもない。しかし、それにしても、なぜ発言者取り違えというケアレスミスを見過ごしてしまったのか。その一つの原因は、引用文中の仲村氏の発言にあった「沖縄人とヤマトンチュを血で線引きし」という文言に反応していたからだと思われる。

「血で線引きし」という状況の把握の在りかた、状況の認識の方向性が、「沖縄問題」にかかわる日本人の間で典型的にみられる発想であり、それゆえに、この発言は日本人である宮台氏が行ったものと早とちりしてしまったのであった。繰り返すが、引用該当書の中で宮台氏はそのような主旨の発言は行っていない。このような状況認識が日本人に典型的にみられることと、著者2名のうち日本人は宮台氏のみであったために、日本人という属性のみを結節点として、その発言が宮台氏によりなされたものと、早とちりをして取り違えたのである。宮台氏に対しては失礼極まりない話で

あったと反省している(なお、これ以後は本稿の議論に入るので、仲村・宮台両氏の表記は敬称略とさせていただきます)。

しかし、「血で線引きし」という発想は、単に日本人に典型的にみられるものであるというだけではない。それは、かつて「沖縄問題」にかかわり始めた頃、私自身が感じた経験を持っているものでもあった。また同様に引用箇所にある「敵と味方の区別もつかず」、「あらゆるヤマトンチュを十把一絡げして」という認識も、じつのところ感じたことがあった。もちろんそれらは20年ほど前のことであり、現在はそのようには考えない。

引用箇所のような社会的文脈において沖縄人が日本人を批判するのは、その日本人個人が自らのポジショナリティに無頓着であり、自らの選択(平和運動や反基地運動への参加)によって日本人というポジショナリティとそのポジショナリティに伴う責任を解除されたかのように振舞うからである。決して日本人の「血」が批判や攻撃されているわけではない。端的に言うならば、ポジショナリティとアイデンティティの混同・錯視が起こっているのである。

しかし今回、引用において発言者を取り違えたことで、それをきっかけとして、かつての私も含めた日本人が、なぜ沖縄人の批判を「誤読」してしまうのか、そのプロセスとメカニズムを考えてみる必要性に気がついた。

そのようなポジショナリティとアイデンティティの錯視、さらには「誤読」はなぜ、どのように発生するのか、さらに重要な問題として、それは誰において、発生するのか。本稿では、私自身の引用取り違えを契機として、沖縄と日本の関係を焦点に、この問題を考えてみたい。最初に、ポジショナリティとアイデンティティの関係について若干の考察を行い、次にジャック・ランシエールの議論を参照して、なぜそのような「誤読」が起こるのかについて考えたい。

この意味で本稿は、昨年度の論考(池田, 2014)の続編であり、同時に「沖縄問題」をめぐる日本人の言説と沖縄人による言説の共鳴の問題を指摘する「沖縄問題」における免責化言説とポジショ

ナリティの錯乱」(池田, 2016a, 予定稿)、ポジションナリティとアイデンティティの両概念の異同とポジションナリティの政治の必要性と可能性を論じた「ポジションナリティ・ポリティクス序説」(池田, 2016b, 予定稿)の続編となるものである(編集の関係で公刊順序が前後している)。

2. ポジションナリティとアイデンティティ

2-1. アイデンティティの2つの水準

議論を進める前に、ポジションナリティの概念を確認し、アイデンティティとの関連を簡単に整理しておきたい。ポジションナリティとは、「所属する社会的集団や社会的属性がもたらす利害関係にかかわる政治的な位置性」を指す概念である¹⁾。それはアイデンティティの隣接概念であるとともに、アイデンティティと相互作用をもち、しかし、アイデンティティでは捉えきれない領域を問題化する概念である。

それを考えるために、沖縄と日本の植民地主義について基礎的な分析を行った野村浩也の以下のテキストを例に、ポジションナリティとアイデンティティの関係を検討したい。

日本人は、日本人であることをやめられない。その一方で、植民者であることならやめられるし、権力を手放すことだって可能だ。日本人であることをやめられないのは、それが日本人のアイデンティティだからである。一方、植民者であることならやめられるのは、それが日本人のアイデンティティではないからだ。このような現実から導き出されたのが、ポジションナリティという概念なのである。[...] ポジションナリティは、基本的に、アイデンティティとは関係がない。「相手が白人だから射つよりも、相手の白人の犯した行為の故に彼を射つ」とマルコム X が述べたのはそのためである。日本人は、彼／彼女自身が犯している植民地主義という行為のゆえに批判されるのであって、日本人であること自体が問題なのではない。(野村, 2005: 43-44、下線は引用者による)

この野村によるテキストは、ポジションナリティとアイデンティティとの関係を、明快かつ簡潔に記述したものであり、私も今までに何度か引用したことがある。ここで述べられていることは、単純明快である。しかし何度も引用するなかで、このテキストには、直接的で単純明快な概念が述べられていると同時に、より複層的な兆候、言いかえれば、より重層的なニュアンス(あるいはニュアンスに導くかすかな“香り”のようなもの)が含まれていることが気になっていた。

ここで冒頭の「日本人は、日本人であることをやめられない」とある部分の「日本人」と、最後の「日本人であること自体が問題なのではない」の部分の「日本人」は、ともに、きわめて厳密に同じものを指している。それは、日本人として生まれたという社会的属性が個人に刻印しているアイデンティティ、日本人としての経験によって、日々書きされている日本人というアイデンティティである。これは「日本人であることをやめられないのは、それが日本人のアイデンティティだからである」という部分の「日本人」も同様である。これを便宜的に「日本人 (A)」と表現する(一重下線の日本人に対応)。

しかし、「植民者であることならやめられるのは、それが日本人のアイデンティティではないからだ」と「日本人は、彼／彼女自身が犯している植民地主義という行為のゆえに批判されるのであって」という2箇所における「日本人」には、ごくかすかに異なったニュアンス、含意が存在しているように思われる。こちらも便宜的に「日本人 (B)」と表現する(波線下線の日本人に対応)。

誤解のないように断っておくが、論理的な水準においては、(A) / (B) 2つの「日本人」は、ともに日本人として内面化されたアイデンティティを指し示す概念として、同じ水準にあり、同じ概念として読解して差し支えない(むしろ同じ概念として解釈すべきである)。しかし、微妙に含まれるニュアンスにおいて、この2つの「日本人」には差が感じられる。「日本人 (A)」は、日本人というポジションによって外的に刻印され続ける情報の蓄積の結果、内面化されたアイデン

ティティというニュアンスが存在しているのに対して、「日本人 (B)」は、それに比べてある種の個人的な選択可能性、能動的な意思による変革可能性につながるニュアンスが含まれている。

仮にここでは、「日本人 (A)」に対応するようなアイデンティティのあり方を「属性反応的アイデンティティ」と、「日本人 (B)」に対応するようなあり方を「能動選択的アイデンティティ」と名づけたい。

「日本人であることをやめられない」のは、日々日本人としての生活を経験し、また外部の存在（この文脈では沖縄人）に日本人として名指しされるからである。男性が男性としてのアイデンティティを獲得・維持しているのは、日々男性として扱われる経験の蓄積によるところが大きい。そのようなアイデンティティの様態は社会的属性によって一定程度規定され、外部からの情報や干渉（あるいはそれへのリアクション）によって内面化されるものであり、「属性反応的」と言えるだろう。

一方で、「犯している植民地主義という行為のゆえに批判」されたり、「植民者であることならやめられ」たりする「日本人」とは、行為発生的（行為にその起源の一端を求めることができる）なものである。女性が女性という「属性反応的アイデンティティ」を持っているのと同時に、女性のジェンダー規範を強く意識して「女らしく」思考したり振舞ったり、逆に規範を拒否すべく「男っぽく」思考したり振舞ったり、ということは、アイデンティティの一端を形成すると同時に、個人的な選択ともかかわる領域である。それらは相対的に個人的で行為的であるがゆえに「能動選択的」と言えるだろう。

「属性反応的アイデンティティ」は、本人の意思とは関係なく社会的属性によって刻印され続け、あるいは外部から自己への認識や概念の侵襲、それに対する反応を経て積み重ねられるものであり、相対的に集合的で受動的で固定的なものである。一方で「能動選択的アイデンティティ」は、「属性反応的アイデンティティ」の影響下にありつつも、その属性をより強めたり、あるいはそれに反

発し、自発的な選択を重ねることを通じて、その経験の蓄積によって形成されるものであり、相対的に個人的で能動的で可変的なものである。

繰り返すが、これらの区分はあくまでも便宜的なものであり、それ以上に相対的なものである。「属性反応的アイデンティティ」も相対的に強固ではあっても絶対に不変ではない。長期的に環境が変化すれば変わるだろうし、またそもそもそのような属性の影響力が小さい個人もいるだろう。また「能動選択的アイデンティティ」も、その選択や能動性の在りかたは社会的属性の影響力とそれへの反応の蓄積である「属性反応的アイデンティティ」との相互作用の中で形成される余地は十分にある。つまり、外部的・属性的な部分と、個人的・選択的な部分は、厳密に分けることは不可能で、かつ相互影響的であり、結局のところこの2つの区分は相対的なものにすぎない。

しかし相対的なものではあっても、ここでこのようにアイデンティティ概念を便宜的に2つの水準に区分して考えるのは、そのように捉えたと、ポジショナリティとの関係性がいくぶん理解しやすくなるからである。というのも、ポジショナリティとアイデンティティの混同・錯視の局面では、ポジショナリティとアイデンティティの混同のみならず、（部分的にはあれ）この2種のアイデンティティの混同も同時に起こっていることが考えられるからである。

2-2. 第1の混同

ここで再び先ほどの野村の引用部分を検討したい。先の引用中に、

ポジショナリティは、基本的に、アイデンティティとは関係がない。「相手が白人だから射つよりも、相手の白人の犯した行為の故に彼を射つ」とマルコム X が述べたのはそのためである。（野村，2005: 43-44）

とあるが、この部分を検討したい。このマルコム X の発言を引いた野村の文脈を解釈するなら、「相手が白人だから射つ」という事態は、白人のアイ

デンティティを理由に白人を射つ、ということである。他方「相手の白人の犯した行為の故に彼を射つ」事態とは、じつは白人のポジショナリティを理由に射つ、ということである。

ここで問題とされる「相手の白人の犯した行為」の中身であるが、もちろん「黒人」への直接的暴力を振った経験がある白人個人の場合には、そのまま文字通りに該当するだろう。射たれるような原因がその個人に個別的に存在しているからである。しかしここで問題化されているのは、そのようなケースではない（それも含まれるだろうが）。直接的に「黒人」へ個人的に暴力を振った経験はなくとも、日常的に暴力や収奪が常態化する状況を黙認し、その状況の上に何がしかの利益や安心を得ているような「個人」の、そのような状態の総体が、「彼」が「犯した行為」なのである。それは、社会的属性によって、個人の意思やアイデンティティ、信条とは関係なく、利益を得ていて、その利益を享受し続けている、という「行為」ゆえに「射たれる」という事態を指している。それは、ポジショナリティに付随した「行為」なのである。

次に引用するのは、昨年度の論考でも引用した新城郁夫の文章である。そして新城もまた沖縄出身である。新城は、沖縄社会における米軍基地の「県外移設論」を批判する文脈で、「県外移設論」の主張には、人種主義が潜在していると指摘する。

くわえて、ここで重要なのが、こうして基地あるいは軍隊の配分に主権者の関心を向けさせる動きの要で人種主義が極めて周到に醸成されていくことである。日本人対沖縄人という対立は、いまや政治的暴力の根本を不問とする憎悪を生み出しているが、この憎悪によって抹消されるものこそ日本という制度への批判であり、国家暴力の源泉たる人種主義への批判である。(新城, 2014: 225)

ここで新城は、「日本人対沖縄人という対立」が、政治的暴力の根本（＝基地という暴力装置の存在そのものや、米軍の世界戦略）を隠蔽し、日本と

沖縄という局所的な憎悪と対立をうみ出し、その憎悪と対立が可能になるのは、そこに人種主義のロジックが潜在・醸成されているからだと批判している。

ここに第1の混同が生じる。最初に、私が発言の取り違えをした際の、仲村による「血で線引き」の文言を例に考えるなら、「血で線引き」されるとは、アイデンティティによって排除される、非難される、という事態である。しかし白人は皮膚の色を理由に「射たれる」のではなく、沖縄の運動の現場に来ている日本人は、その日本人の「血」ゆえに非難されるのではない。

圧倒的な人口差を背景に、沖縄に基地を集中させ続け、その犠牲の上に平和と安全を享受している集団（日本人）のポジショナリティに無自覚なまま、そのポジショナリティを越境し、全能的な自己規定が可能であるかのように（それが可能なのは権力者である）、沖縄人に混じって反対運動に参加し、そのような不平等を解決する具体的な「行為」を行っていないことを、批判されているにすぎない。この仲村の発言で描写されている沖縄人による批判は、徹頭徹尾ポジショナリティの領域にかかわる問題である。この仲村の描写は、ポジショナリティへの批判を、アイデンティティへの批判と置き換えるものである。

おそらくは、ここでの「血」という表現は比喩であろう。文脈からは仲村が単純に「血」という優生学的なフィクションを信じているとも思えない。ここで「血」と表現されているものは、沖縄以外の日本列島に出自をもつ、集合的な意識と存在の在りかたである。すなわち、「属性反応的アイデンティティ」に相当するものである。しかし次に引用した新城の場合は、そのことを、よりはっきりと「人種」と定義している。

新城の議論もまた、ポジショナリティへの批判を「日本人対沖縄人という対立」という「属性反応的アイデンティティ」の対立と見なしている点で仲村と同様である。のみならず、その「対立」を人種主義という文脈に置き換えている点で、より日本人に対して混同を肯定するものとなっている。「人種主義」という言葉は、どのように解釈

してもダーティー・ワードであり、沖縄人による「県外移設」の要求が「人種主義」であるならば、それは意に介する必要のない「不正義」として解釈されうるからである。その結果、日本人はより安易に自らの「属性反応的アイデンティティ」が攻撃されている事態であると、安心してポジショナリティとアイデンティティの問題を混同・錯視することが可能になる。

これらの「血」・「人種」というタームは、ポジショナリティをめぐる責任の追及を、「属性反応的アイデンティティ」への不当な攻撃へと再配置する効果をもたらす。そのような再配置（すり替え）によって、日本人（ならびに権力関係における抑圧者全般）は、自らのポジショナリティをめぐる責任から目を逸らし、被抑圧者による異議を黙殺することが可能になる。

2-3. 第2の混同

ポジショナリティとアイデンティティをめぐる第1の混同は、ポジショナリティと「属性反応的アイデンティティ」との混同であった。次に第2の混同について考えてみたい。

たとえば、日本人で、平和運動や反基地運動に長年かかわってきた人々の中には、日本人としてのポジショナリティを批判されること、とくに県外移設論や「基地の“本土”への引き取り」との関連でポジショナリティを批判されることに対して、激越な怒りの感情を露わにする人がいる。

その理由の1つは、「基地は、沖縄にも、日本にも、どこにもいない」といったスローガンに代表されるように、基地問題を平和運動としてのみ捉え、沖縄に負担を集中させているという不平等を第二義的に考える運動の立場と関連しているだろう。この立場からは、達成すべき目標は（日本の主権領域からの）基地の全廃であり、やがて全廃されるべき基地が現在どのように偏在しているかは二義的な問題であり、ましてや「本土移転」や「引き取り」は新たな基地建設であって、絶対に容認できない、という見解が導かれる。この立場は、基地の偏在・集中という不公平・差別にかんする問題を、平和の問題に置き換えてしまっ

ている²⁾。

しかし、激しい怒りの反応は、この論理的な水準のみに留まらない。それはより個人的なアイデンティティの領域からの反応と思われる。平和や人権という分野の活動にかかわってきたという、その個人の個人史的な経験の蓄積は、能動的な選択の積み重ねの結果であり、その個人の「能動選択的アイデンティティ」の一部を形成していると考えられる。そのような意識に対して、日本人というポジショナリティを批判されることは、自らのアイデンティティ（「属性反応的アイデンティティ」）を批判されているという混同を引き起こし、さらに加えて、批判されているのは、自らの選択や能動性にかかわる部分だと、二重の混同・錯視が起りやすくなる。なぜなら、自らの能動的な選択によって、沖縄の基地問題や、平和といった領域にかかわってきた（かかわっている）という「能動選択的アイデンティティ」が強く意識されている場面において、ポジショナリティが批判されるからである。

個人的に、平和や人権を希求して、また活動してきたのに、その自分の在りかたが、「日本人ということ」を理由に批判されるとは、心外であり、理解できない、という状況である。そして、自分が認識論的にどのような状況に置かれているかを理解できないがゆえに、その理解できない状況に対して苛立ちを感じ、非常に激しい怒りが表明されるのである。

本項冒頭において紹介した昨年度論文の発言取り違えの箇所において、仲村が表現していた「敵と味方の区別もつかず」、「あらゆるヤマトンチュを十把一絡げして」という文言は、このような機微を経由して、日本人に意識されるだろう。

繰り返すが、これらは私自身もかつて感じたことであった。ポジショナリティが理解できないと、沖縄人からの批判は、自らのアイデンティティに対する批判、それも日本人であるという「属性反応的アイデンティティ」と、さらにその日本人が自らの選択として「沖縄問題」にかかわっている、という「能動選択的アイデンティティ」を批判されていると、二重の混同を引き起こしてしまうの

である。

日本人という「血」を根拠に排除され（ポジショナリティと「属性反応的アイデンティティ」の混同）、さらに平和や基地問題にかかわろうとしている自分個人の在りかたが批判されている（「属性反応的アイデンティティ」と「能動選択的アイデンティティ」の混同）と感じるのだ。そのような批判は不当であり、日本人であるというだけで「十把一絡げ」にされ、政府の役人や保守派ではなく平和を希求している善良な自分個人を批判するのは「敵と味方の区別もつ」していない、と感じるのである。その結果、そのような批判を行う沖縄人（個人）の側に何かしらの問題や欠落があるに違いない、との結論が導かれる。その結論を補強し、批判を行ってくる沖縄人に個人的に存在している「問題や欠落」を指し示すものとして「人種主義」などの概念が働くことになる。そしてそのように、これまた、批判がその批判を行っている沖縄人個人の資質（アイデンティティ）に還元されて解釈されてしまうがゆえに、さらにポジショナリティの問題を察知する契機から遠のいてしまうのである。

しかし、あくまでもここで沖縄人に批判されているのは、不平等な関係に基づくポジショナリティを変更できておらず、利益を得続けていることに対する、分有された責任であり、日本人として形成された「属性反応的アイデンティティ」でもなく、ましてや、平和運動や人権活動にかかわろうとしてきた（いる）能動性やその選択に基づく個人的なアイデンティティでもないのである³⁾。

この点を混同しているがゆえに、先に引用した野村のテキスト中のマルコム X の例にならえば、「相手の白人の犯した行為の故」の「行為」について、それは日本人に生まれ落ちたことによる「属性反応的アイデンティティ」を保持していること、さらには、様々な選択を行って被抑圧者とかかわることそのもの、と誤読してしまうのである。その結果、「では、かかわるなというのか」、「沖縄のことは沖縄人でなければわからないのか、発言してはいけないのか」、「沖縄人に排除された」と、見当違いの感覚にとらわれ、的外れな怒りに駆ら

れることになる⁴⁾。

2-4. 「能動選択的アイデンティティ」の問題

ここまで考えたところで、再度、本節（第2節）冒頭の野村のテキストに戻る。先に「日本人(B)」と表現した、「植民者であることならやめられるのは、それが日本人のアイデンティティではないからだ」と「日本人は、彼／彼女自身が犯している植民地主義という行為のゆえに批判されるのであって」という2箇所における「日本人」であるが、この「日本人(B)」は、「能動選択的アイデンティティ」への含意を伴ったものといえるだろう。すなわち、「植民者をやめる」、「植民地主義という行為」をやめることは、能動的選択の問題であり、「能動選択的アイデンティティ」の領域の問題であるからだ。

ところで確認しておかなければならないのは、野村がここで論じているのは、アイデンティティではなく、ポジショナリティについてであるということだ。植民地主義をやめることは、ポジショナリティの関係性を変革することである。そして、そのような変革は「能動選択的アイデンティティ」の積み重ねによって可能となる。つまり、ポジショナリティは「属性反応的アイデンティティ」や「能動選択的アイデンティティ」とは別のものとして存在しているが、ある関係におけるポジショナリティは可変的であり、それは「能動選択的アイデンティティ」に基づく実践によって変革が可能ということである⁵⁾。

そしてこの点は、「能動選択的アイデンティティ」にまつわる、もう一つの論点を提起する。すなわち、このようなアイデンティティとポジショナリティの関係について一定程度の理解を持つようになるならば（たとえ「ポジショナリティ」という文言を用いていなくとも）、その状態でポジショナリティを無視し続けることは、新たなアイデンティティ上の責任を呼び込むことになる、という事態である。

もちろん、「無知の暴力」、「愚鈍による暴力」という視点に立てば、ポジショナリティに意識的であろうと、なかろうと、ポジショナリティと被

抑圧者からのポジショナリティ変革の要求を無視することは、責任を問われる事態であることに変わりはない。しかし、ポジショナリティという概念、さらにはポジショナリティとアイデンティティの関係性についてある程度の認識があるならば、被抑圧者からのポジショナリティ変革の要求から目を逸らし続け、無視し続けることは、意図的かつ個別的、個人的な「行為」として責任を問われることになる。なぜなら、その場合「目を逸らし続け」ることや「無視し続ける」ことは、はっきりと、能動的で、選択的な態度となるからだ⁶⁾。

ポジショナリティを認識しつつもそれを黙殺するならば、それは一つの「能動選択的アイデンティティ」の問題となり、今度こそは、ポジショナリティでもなく、「属性反応的アイデンティティ」としてでもなく、その個人に個別的な「能動選択的アイデンティティ」が批判の対象となりうる。

ここに、社会的不平等を解消するために、ポジショナリティという概念をアイデンティティと分離し、かつその両者の関係を明示し、かつそのことを可能な限り世の中に広めなくてはならない理由が存在する。ポジショナリティという考え方が広く世の中に周知されれば、それでもポジショナリティを黙殺しようとする個人を、その個人に特有な個別的なアイデンティティの責任の問題として、問題化し追及することが容易になり、差別的事態と社会構造の変革につなげることが可能になると思われるからだ。

3. 「政治」とポジショナリティ

ここまでの議論において、ポジショナリティをアイデンティティの問題として誤読することの問題点を指摘した。しかし、日々、ポジショナリティはアイデンティティと誤読され続けている。それはどのようなプロセスとメカニズムによって起きているのだろうか。これより、ジャック・ランシエール (Jacques Rancière) の議論を手掛かりに、その点を探りたい。

ランシエールは、平等を起点に様々な社会的現象を批評している哲学者であるが、彼の議論の特

徴として、「ポリス」と「政治」という2つの概念を、厳密に、峻別している点が挙げられる。

我々が日常的に政治という言葉で認識しているものは、ランシエールの議論においては「ポリス」の領域に属するものと位置付けられている。「ポリス (police)」とは、「共同体の象徴的構成、感性的なものの分有の形式」であるという (Rancière, 2005=2008: 152)。社会 (共同体) の内部において、そのメンバーシップが予定され、身体的存在として、また集団内での「分け前」の当事者として想定されている者たちの間での、秩序のことである (Rancière, 1995=2005: 58-60)。その秩序の再編成／再編制にかかわる動態は、「ポリス」に属する事柄である。

この「ポリス」という概念において肝要なのは、その構成員に「ロゴス」が共有されていることを前提としている点である。ここでいう「ロゴス」とは、たんに言語という意味ではなく、構成員に意味あるもの、価値あるものとして共有されている秩序感覚、意味のある言葉として共有されることへの「考慮＝計算」を内包した概念である (Rancière, 1995=2005: 47-51)。逆に言えば、「ロゴス」を共有すると認められた者のみが、意味のある存在であり、「考慮＝計算」の対象であり、「分け前」の当事者である。「ロゴス」とは、「ポリス」のメンバーシップと外縁を決定する概念でもあり、「ロゴス」の存在と共有が「ポリス」の領域を設定しているのである。「ポリス」とは、そのような秩序における、諸要素の配置と再配分の秩序である。

ところで、ランシエールはこの「ポリス」に「政治 (politique)」という概念を対置する。ランシエールにおける「政治」とは、「ロゴス」を共有しない者が「ポリス」の秩序に介入することによって発生する係争のことを指す。「ポリス」の秩序から除外され、本来、「ロゴス」を「話す」ことがないとされる者 (=分け前なき者) が、「ロゴス」とそれを基盤とした「ポリス」の秩序に介入するような事態である。この介入のことを、ランシエールは「間違い (トール)」と表現する (Rancière, 1995=2005: 47-49)。

ランシエールは古代ギリシャの奴隷制社会を例に出しながら、「ポリス」の外部におかれ、「ポリス」からは「ロゴス」を共有していないと見なされ、したがって「考慮=計算」の範疇に入れられてこなかった者、すなわち「分け前なき者」たちが、「分け前」を求めて「ロゴス」に介入し、「ポリス」の秩序を中断させる事態、すなわち「間違い（トール）」が顕わになる事態を「政治」と位置づける（Rancière, 1995=2005）。

ランシエールの「政治」概念において重要なのは、「政治」は共同体の秩序としての「ポリス」の認識上の外縁、外部との接点において発生すると考えられている点である。たとえば、既存の階級間における階級闘争は「政治」ではない。たとえ最下層の階級であっても、共同体の中に位置づけられている限り、それは「分け前ある者」であり、その「分け前」の多寡をめぐる階級間の闘争は「ポリス」内部の秩序の再編成／再編制にすぎないからである。それに対して「政治」とは、「階級の外」におかれてきた「分け前なき者」が、「ポリス」の秩序に介入し、新たな秩序を創設する契機である。この点を、ランシエールはマルクスによるプロレタリアートという概念の創出を例に以下のように論じている。

マルクスは、プロレタリアートとは一つの階級ではなく、すべての階級の解消であり、この点にその普遍性があると言うことになる。この言明にあらゆる一般性を与えなければならない。政治は、本当は階級ではない複数の階級のあいだに係争を創設することである。（Rancière, 1995=2005: 45）

当初それ（＝プロレタリアート：執筆者補足）は大産業の労働者の集団という、歴史的に限定された社会集団の名前のはずでした。しかし「プロレタリアート」はまず、「子どもをつくる人」を意味する法律上のラテン語の名詞です。つまり、名前も言葉も持たず、名前を伝えることなく再生産される存在です。したがって「プロレタリアート」は、一九世紀の労働者闘争という

特異性と、名前をもたない存在の政治的共同体への潜在的包摂とを結びつける名詞となりました。それは、仕事と再生産の世界を公共的な言葉と活動の世界から切り離すポリスの論理を撤廃する名詞になりました。また、たんに一つの社会的カテゴリーの要求を表すだけでなく、言葉と騒音の布置そのものを描き直す、様々な形式の言表を指す名詞になりました。政治的対話は、原理上不合意的であり、不合意的である限りにおいて包括的です。[...] それによって政治的対話は、計算されてこなかった人々の包摂を行うのです。（Rancière, 2005=2008: 155-156）

マルクスの「プロレタリアート」という概念は、「社会の一階級であるが、社会の一階級でない」というマルクス自身の定義に見られるように、「ポリス」の外部からの「闖入者」としては一つの階級といえるが、その在りかたを通じて既存の「ポリス」の階級秩序やその決定方式や決定論理そのものを刷新するという意味では、もはや「ポリス的な一階級」ではありえないということである。この「プロレタリアート」という概念が典型例であるように、ランシエールにおける「政治」とは、「間違い（トール）」を通じて、既存の「ポリス」の秩序から排除されてきた者たちが、その秩序に介入し、係争を創設し、既存のポリスの秩序を解体し、新たな秩序を作り、包摂の様態を改変する過程である。

ここでランシエールの「政治」概念を検討したのは、沖縄と日本の関係に焦点をあてて、ポジショナリティの「誤読」を考える本稿において、状況を整理する枠組みの一つとして有効と思われたからである。もちろん沖縄県は日本の都道府県の一つであり、沖縄県民も日本国籍を有してはいる。しかし、古代ギリシャの奴隷制社会が、奴隷の存在を前提としつつも、奴隷たちをはっきりと「ポリス」から排除して成立していたように、日本という「ポリス」の秩序は、「沖縄人」と名づけうる存在を、少なくとも基地負担の分配の決定という面においては、その秩序の外においてきたと言ってよい。それは近代以降に続いてきた沖縄差

別や、その継続として米軍基地が集中していること、沖縄人による基地撤廃要求がことごとく無視されてきたことによる、「ボリスの人権秩序」における排除、外部化である。

日本人とは、米軍基地という「分割線、国境」を沖縄人に押しつけている張本人にほかならない。〔…〕日本人は、七五パーセントもの在日米軍専用基地を押しつけること、すなわち、沖縄人を搾取することが可能な植民地主義権力なのである。〔…〕日本人は、日本人と沖縄人とのあいだに、植民者と被植民者というマニ教的二元論的な分割線を引いているのだ。

その意味で、沖縄人とは、日本人によって暴力的に植民地主義のターゲットとされた被植民者、あるいは、「日本人あつかいされないもの」と定義するよりほかない存在なのである。つまり、沖縄文化や沖縄人というアイデンティティを有するから沖縄人なのだというだけでは決して正確ではないのだ。〔…〕日本人あつかいしないことによって沖縄人を生みだしつづけているのである。(野村, 2005: 42-43)

ここで野村浩也が指摘する「マニ教的二元論的な分割線」とは、ランシエールにおける「ボリス」の内と外を分ける外縁線と同じ意味をもつ。もちろん、沖縄県民も日本国民である以上、社会保障を受ける権利や参政権は、他の日本人と同様に有している。しかし、古代の奴隷とてまったくの無権利ではなく、旧約聖書の時代から一種の「奴隷の権利」のようなものが存在していたことに注意が必要である。沖縄人を古代の奴隷と同一視する意図はないが（それはあまりに乱暴な立論である）、しかし、ランシエールが指摘している点は、「分け前」をめぐる諸点であり、その「分け前」とは、たんに経済的資源のみを指すのではなく、むしろ「ボリス」の秩序への参加権を指し、自らの在りかたを半強制的に決定してくる「ボリス」の秩序権力を解体する、「政治」の目的でもあった（プロレタリアートの事例を想起すればよい）。

その意味で、野村が指摘するように、少なくとも

も基地をめぐる決定権と人権という局面においては、「沖縄人」とは「日本人あつかいされないもの」として、日本人の「ボリス」から排除されてきた「分け前なき者」の別名である。「沖縄人」は、その「分け前」、すなわち安全な生活から排除されること（日常的に米軍の暴力にさらされている）と、その状況に対しての決定権を分有すること、から排除されてきた。「考慮＝計算」の埒外の存在とされてきたのである。

そのように考えると、野村の指摘通り、「沖縄人」とは、ポジショナリティによって構成される概念であることがわかる。「分け前なき者」は、あくまでも「ボリス」の秩序権力によってうみだされる制度的な存在であり、アイデンティティとは関係のない存在である。奴隷が奴隷である理由は「奴隷というアイデンティティ」を持っているからではないのと同じである。沖縄人が「沖縄人」であるのは、日本の「ボリス」によって規定された事柄なのである。それは、沖縄人個人が「沖縄人としてのアイデンティティ」を持っていようが、いまいが、それとは関係なく現存する事柄である。したがって、沖縄人／日本人という認識枠組みは本質主義であるという批判や、沖縄人／日本人という対立が憎悪をうみだしているという批判や、沖縄人／日本人という認識は人種主義的であるという批判は、すべての外れである。これは、認識の問題ではなく、「ボリス」の秩序権力の問題であり、現存する秩序の事実の暴露にすぎない。事態は、はるかにシンプルな、日本という「ボリス」の権力が作り出す不平等の問題であり、そこから日本という「ボリス」のメンバーが享受している利益の問題である。その構造を顕在化させる呼称が「沖縄人」なのである。

このように考えれば、少なからぬ日本人が、「沖縄人／日本人」という用語法そのものに激しく異を唱える理由も明白である。それは、たとえ直感的であれ、「沖縄人」という「名乗り」が、日本の「ボリス」秩序に係争をもたらす「政治」を呼び起こすことを察知するからである。すなわち、「沖縄人」という呼称は、日本人の「ボリス」の秩序に対する介入の第一歩であり、日本の「ボリス」におけ

る「政治」の始まりを告げる雷鳴でもあるのだ。

ちなみに、この点はなにも国民国家を至上とするナショナルな文脈においてのみ見られるものではない。反基地運動等の、いわゆる左派系の運動体においても同様である。そこには「左派のポリス」が存在しているからである。その「左派のポリス」の秩序が、ナショナリズムを基盤としているにせよ、あるいはインターナショナリズムを基盤としているにせよ、日本の党派的運動においては、数の上で日本人が主導権を握り、沖縄はその運動の「前線・前衛」と位置づけられてきた。ここではイデオロギーを中心とした「ポリス」的秩序が存在し、その文脈に「沖縄人」という「事実としての存在」が介入することは、その秩序に対する「政治」が始まることを意味する。したがって、反基地運動や平和運動においても、「沖縄人」という呼称や沖縄人の主体性を基盤とした「県外移設論」は、「ナショナリスティックな反動」、「運動の分断」として指弾されることになる。

いずれにせよ、「沖縄人」という「名乗り」は、「ポリス」の秩序に係争をもたらす、「見えなかった存在」を可視化する宣言である。その意味で「沖縄人」はポジショナリティを表現する語彙であり、ポジショナリティは「政治」を実践するための基盤となる概念枠組みとなる。ポジショナリティは隠されていた権力関係を顕在化させ、新たな争点として社会が共有するための枠組みである。そしてポジショナリティを通じて開始される「政治」こそが、新たな包摂と秩序を再編成／再編制し、「ポリス」の外縁を拡大し、新たな人々の間の関係性を構築する契機を提供するのである。その意味で、ポジショナリティは社会を変革するための概念装置であると言えるだろう。

4. 「不和」とポジショナリティ

しかしながら、ランシエールが指摘するように、既存の「ポリス」の秩序を自然で自明のものと捉えている人々にとっては、「政治」とは「間違い（ツール）」でもあり、「ポリス」の外部の存在による「ポリス」への不当な闖入・攪乱と映るだろ

う。そのため、もっとも典型的に見られる反応は、その「間違い（ツール）」を理解しない、という行動である。

ここで強調しておきたいのは、その反応は、あくまでも「間違い（ツール）」を「理解しない」のであって「無視する」、「黙殺する」とは異なる点である。「無視」や「黙殺」は、事態を理解したうえで選択される行為であるが、「理解しない」という行為は、文字通り事態を「理解しない」ことである。そして「理解しない」は「理解できない」とも異なる。「理解できない」という事態は、理解するための基礎となる情報や知識の欠落が前提となるが（能力の問題は横に置き）、「理解しない」という事態は、「理解する」ための情報や知識を十分に保持している状態でありながら、それを行わないという状態なのである。それは、たとえ無意識的であれ、明らかに能動的で選択的な「行為」である。

この点について、再びランシエールの議論を参照したい。ランシエールは、「分け前なき者」は、「ポリス」を規定する「ロゴス」から排除されているものの、単純な言語体系から排除されているわけではないと論じる。例として、古代の奴隷制社会では、奴隷たちもまた、言語体系としての「ロゴス」は共有していたことを指摘する。そもそも、主人と同じ言語体系を共有していなければ、主人の命令を理解することはできず、奴隷制度も成り立たないからである（Rancière, 2005=2008: 138）。

しかし、体系としての言語を理解し使用できるからといって、それは「ポリス」における「ロゴス」を共有していることにはならない。奴隷が言語を理解するのは、あくまでも主人の命令を理解するためであって、主人と同等な「ロゴス」の保有者として、主人と同等に自由に意思を表明したり行使したりするためではない。このような、いわば言語体系としての機能的な「ロゴス」と、存在体系としての「ロゴス」の不均等な分配のことを、ランシエールは「感性的なもののパルタージュ（分割＝共有）(partage du sensible)」と表現し、この「パルタージュ」によって、その人が何であるかによってその人が可能なことを定義し、その人が可能な

ことによってその人が何であるかを循環的に定義している、と論じる (Rancière, 2005=2008: 139)。

ランシエールは、古代ローマにおいて平民が貴族に対して分離独立を求めた逸話において、貴族たちがどのように平民の「ロゴス」を理解しなかったかを紹介している。

非妥協的な貴族たちの立場は単純である。すなわち、平民は話さないという単純な理由から、平民と討議する場はないというのである。平民は、名のない存在であり、ロゴスを欠いた、つまり都市国家への象徴的な登録を欠いた存在であるがゆえに、話さないのである。平民たちは、純粹に個人的な生を生活しているものであり、個人的な生は、生命そのものを除いては何ひとつ伝えず、再生産機能に限定されている。名のない者は話す可能性がないのである。(Rancière, 1995=2005: 50-51、傍点原文)

この逸話が示しているのは、「話す」ことは、言語能力の有無に規定される事柄ではなく、その発話(発声)主体の「ポリス」的秩序における位置づけに規定される、ということである。このような、秩序感覚(感性的なものの分割=共有)の齟齬がうみだす対話不可能性を、ランシエールは「不和(mésentente)」と名づける。ランシエールにおける「不和」とは、「そこでの対話者が同じ言葉で同じことを理解していると同時に理解していない」という事態である(Rancière, 1995=2005: 11)。つまり、語彙やその意味の解釈をめぐる誤解や不正確な伝達に基づくコミュニケーションの失敗ではなく、話されていることの内要自体は適切に理解され、情報は交換されているにもかかわらず、それがなぜ交換されているのかについての了解が存在していない状態である。ローマの貴族たちは、平民の主張内容を理解しつつ、なぜそのような主張が平民の口から発せられているのかを理解しなかったのである。なぜなら平民が「ロゴス」を持つ存在とは思っていないからであり、平民に「ロゴス」が存在しない以上、平民が「ロゴス」を行使すること自体がありえず、その主張および

「ロゴス」の行使は存在していない、と考えたからである。換言すれば、「不和」とは「話すことの意味についての言い争いが、発話状況の合理性そのものを構成しているような事態」(Rancière, 1995=2005: 11)なのである。

2014年11月に普天間基地の辺野古移設に反対し、基地の県外移設を求めた翁長雄志沖縄県知事が当選した際、あるいは同年12月の衆議院選挙において、同様に辺野古移設反対の候補者が沖縄の小選挙区で当選し、自民党の候補者が全員落選した際、政府は辺野古移設を「粛々と進める」と繰り返す反応を示した。沖縄人の「県内移設拒否」という意思表示は、民主主義による選挙という、「ポリス」が予定しているはずの手続きを経て表明されたのである。しかしその声は、政府の手続き論や行政の継続性といった論理(辺野古受け入れは、前知事によって表明されていた)、言い換えれば「ポリス」的秩序を根拠に、「了解」されなかったのである。この事態は、じつのところ沖縄人が日本という「ポリス」の範疇から疎外されたことを顕わにしたといえる。「ポリス」の予定している選挙という手続き(それも相当程度にプライオリティの高い)にしたがったにもかかわらず、その「分け前」への要求は、理解されず、了解されなかったのであるから。

また、翁長雄志沖縄県知事が2015年9月にジュネーブの国連人権理事会で演説し、沖縄は基地を押しつけられ差別されてきたと表明した際、翁長発言の立場の正当性に対して異議を唱える声もあった。一地方自治体の長が、国際会議で差別を訴えることへの違和感である。これは、被差別の主体としての「沖縄人」という存在の否定でもあった⁷⁾。

貴族たちは平民たちにこの種のいかなる共通性も認めません。討議の舞台も、その対象も、その主体も見ないのです。このような拒否は、行為遂行的矛盾ではなく、二つの世界の感性的な異質性に属するものです。平民たちの方は、自分たちの大義を立論するだけではいけないのです。自分たちの立場が、立論となりうるような

舞台を作り出さなければならないのです。その舞台の上で、貴族たちが見ようとしない対象を見えるようにし、貴族たちが耳を貸そうとしない主題に耳を傾けさせなければならないのです。一つの共通性〔共同体〕を創設し、そのような共通性の存在を否定する者たちさえもそこに含み込まねばならないのです。(Rancière, 2005=2008: 143)

このランシエールによる解説をふまえて考えるならば、「沖縄人」というポジショナリティの表明と、それに対する「日本人」というポジショナリティの措定が、状況に対していかに革命的であるかが理解できる。「沖縄人／日本人」という概念措定は、人々を分断するためのものでもなく、相互の憎悪を掻き立てるためのものでもなく、ましてや人種主義を導入するためのものでもない。それは「一つの共通性」を創設するための必要不可欠な基盤である。

沖縄人が「沖縄人」ではなく「沖縄県民」である限り、基地問題は日本という「ポリス」のなかの、感性的秩序の布置にかんする問題に置き換えられてしまう。実際には、沖縄人はその「ポリス」のメンバーとして「考慮＝計算」されてはいないにもかかわらず、である。その結果、住民エゴ、補助金をめぐる問題、平和運動の前衛、等の意味が付与され、それらの意味づけにそぐわない解釈（たとえば「基地問題は差別問題である」等）は、了解されることはない（「不和」の顕在化）。なぜなら、沖縄県民は沖縄県の住民であり、日本国民でもある以上、「住民」「補助金」「平和運動」といった「ポリス」の秩序の内側での位置づけや、あくまでもそれらの文脈の範囲内に限定された「分け前」の再編成／再編制を要求することはあっても、「沖縄人」として、根源的な他者として「ポリス」の外側から係争を持ち込むことなど、論理的にありえないからだ。それはあくまでも、地方の発展や諸条件とのなかで「考慮＝計算」されるべき、同様に他の多くの都道府県が抱える「地域の問題」の一つにすぎなくなる。

沖縄人の場合、古代ギリシャの奴隷や古代ロー

マの平民の場合ほど状況はシンプルではない。沖縄人の場合は、一見、形式的には「ポリス」の秩序に包摂されているかのように見える。たとえば、社会保障費の受給権利や参政権も保持している。しかしその在りようの呼称は、あくまでも「沖縄県民」であり、けっして「沖縄人」ではない。

と同時に、その「ポリス」的な「ロゴス」や分有される「分け前」（自らの社会への参加権）については、沖縄以外の日本人と同等ではない。それは、基地問題への決定権、あるいは安全な生活への権利、等において明白に現れている。それらの生存と尊厳における重要な領域において、沖縄人は、実際のところ、日本人として扱われていないし、日本という「ポリス」的秩序の外部の存在である。したがって、沖縄人による基地撤去要求や、県外移設要求、安全保障政策の在りかたの見直しの要求、等は、日本の「ポリス」によっては理解されない。日本人は、沖縄人にそれらの事柄についての「ロゴス」、参加権としての「分け前」が共有されているなどとは、思っていないからである。したがって、それらの要求は、言語的には了解されても、要求の合理性については了解されないという「不和」が発生する。たとえば「沖縄県民の基地反対は政府や補助金や振興策を引き出すためのカード」といった日本人の反応は、そのような「不和」が顕在化した事例である。

沖縄人は、日本という「ポリス」の存在様式にかかわらない領域においては、一定の権利を他の日本人とともに「沖縄県民」として「分有」している。しかし、日本という「ポリス」の存在様式そのものに影響を与える領域、沖縄人自らの在りかたを決定することにかんする領域においては、「ロゴス」を持たない者として疎外され、外部化され、「分け前」は与えられず、「考慮＝計算」の埒外におかれている。その存在は、いわば「名前のない存在」、「計算されない者たち」であり、その固有名詞の欠落によって、存在もまた認識されず、「ポリス」の外部に排除され続けるのである。したがって、沖縄人が「沖縄人」と「名乗る」ことは、この認識の秩序に中断を迫り、係争を持ち込むことを意味する。

これらは「不和」の顕在化によって、眼に映るものとして認識されやすくなる事柄である。しかし「不和」は、単に「ポリス」の権力の再生産ということの意味するものではない。「不和」は「政治」の萌芽によって顕在化するものであり、「不和」が顕在化した時には、かすかにではあるが、しかし決定的に、既存の「ポリス」的な秩序権力にはヒビが入っているのである。

このような意味において、「日本人」というポジショナリティの措定は、日本という「ポリス」秩序の現状における不当さを、より直接的に表現し、その解体と再編成／再編制を迫る発端となりうるだろう。

労働者運動や女性解放運動と呼ばれたものは、公共世界と私的・家庭的世界、生産と再生産に運命づけられた世界と、公共的な活動と言葉に運命づけられた世界のあいだの分割＝共有を、問題にし直すことでした。[...] そうするためには、彼らが語っている共通の対象を見ようとせず、彼らが語っているとは聞かず、自分が討議の当事者だとは思っていない雇用主や男性、統治者たちを、対話の装置（ディスポジティブ）の相手として含みこまなければなりません。この非対称性によって、政治的な対話が、あらゆる単純な〔言葉の〕やりとりの状況から区別されます。（Rancière, 2005=2008: 145）

ランシエールの「政治」という文脈において、労働者運動や女性解放運動の大きな成果は2つあるだろう。1つめは、もちろん「労働者」、「女性」というポジションを顕在化させ、主体化させた点である。2つめは、同時に「雇用主」、「男性」という「ポリス」的秩序における既得権益者を、それぞれの立場として明確に名指ししたことである。もちろんこれらの立場は、完全に解体されたわけではないし「ポリス」的秩序における優位性も継続している。しかし、その特徴と様態が隠蔽され自明のものとしてカテゴリー化されていなかった状況と比べてとき、これらのポジションが顕在化されたことにより、明らかにその様態は制

約を受け、その「分け前」は無条件・無限定なものではなくなっている。これらは「政治」によって、そのポジションの在りようが明示化された帰結である。

「沖繩人」というポジショナリティが、同時に照射するのは、「沖繩人」というポジションを作り続けている、「日本人」のポジショナリティである。「沖繩人」というポジショナリティが一般化すればするほど、「日本人」というポジショナリティが問われる社会的場面は増加する。そのことは、自らを「ポリス」の構成員として自明視し、無徴のものとして「分け前」の秩序の中心に特権化してきた存在が、有徴化され、相対化され、秩序において脱中心化される可能性を高める。それは既存の「ポリス」の秩序、「ポリス」の感性、「ポリス」で予定されている「ロゴス」の在りかた、にしたがう限りにおいて、「間違い（トール）」であり、避けるべきものとなるだろう。

しかし、新たな「政治」の登場は、従来の「ポリス」の秩序や感性の布置とは異なる「感性的なものの分割＝共有」を可能にし、また実際にもたすだろう。それは、日本人、男性、その他の「ポリス」的な権力保持者にとっても、新たな自己の発見であり、新たなコミュニケーションの開拓であり、新たな感性の獲得であり、新たな「ロゴス」の構築となる。そのことへの希望と、従来の「ポリス」的秩序への執着と、その間での、個人における「能動選択的アイデンティティ」の形成の在りようが、個人レベルにおいて問われることになるだろう。

5. 残された課題

ここまで、昨年度の論文における発言者の取り違えを契機として、ポジショナリティと「属性反応的アイデンティティ」との混同、さらに「属性反応的アイデンティティ」と「能動選択的アイデンティティ」の混同について考え、これらの混同からポジショナリティを峻別する必要性を指摘した。そして、ポジショナリティの自覚は、新たな「政治」の可能性をうみ、その「政治」が「不和」を

引き起こし、その「不和」がさらにポジショナリティを明示化するプロセスを検討した。そのプロセスのなかで、誰かを「ロゴス」において排除して成り立ってきた「ポリス」的権力は、変更ないしは再考を余儀なくされる必然性を指摘した。

それらを確認したうえで、つぎに、残された3つの課題について簡単に述べたい。

1つめは、本稿の発端ともなった、仲村清司の「血で線引きし」という表現、あるいは新城郁夫による「人種主義」という表現の、ポジショナリティとの関連における解釈の問題である。これらは、日本人のポジショナリティとアイデンティティの混同を促進し、「ポリス」的秩序を強化するものであり、本稿ではいわば「日本人の言説」という位置づけで扱ってきた。しかし実際には、この2つの表現は沖縄人によってなされたものであった。論理的には「日本人のロゴス」でありながら、現実には「沖縄人の表現」であったのである。

この点は、どのように解釈されるべきなのだろうか。もちろん、これらの表現はポジショナリティを錯視させる効果を持つ以上、ポジショナリティとかかわっていることは間違いないが、そこには、仲村や新城に代表される人々に見出しうる、被抑圧者というポジショナリティをめぐる混同の問題が存在している。それは抑圧者である日本人における混同と同様に、「感性的なものの分割＝共有」をめぐる、「ポリス感覚」の共有、その認識と彼ら自身のポジショナリティへの認識（あくまでも「認識」の問題である）の相関と相克が焦点となるだろう。実際には「ポリス」から外部化され、「分け前」を「分有」していないにもかかわらず、あたかも「分有」しているかのように受け取ってしまう「感性的なものの布置」の問題とも換言できるだろう。

あくまでも認識上においてであるが、日本人というポジショナリティに同一化し、日本の「ポリス」的秩序感覚と、その基盤となる「ロゴス」を保持していると認識しているならば、たとえ沖縄人とされる人々においても、「沖縄人」と「名乗り」をあげて「政治」を実践しようとする沖縄人との間に、「不和」は現出しうる。ここに沖縄人対沖

縄人、沖縄人対日本人という2種類の「不和」が同時に存在する事態が予想され、その問題の切り分けを複雑なものにしている⁸⁾（この点は、たとえば男性と女性といったジェンダー領域における「ロゴス」、「ポリス」、「政治」、「不和」、という構造においても、まったく同様の事態が想定されうる）。

この問題は、本稿では紙幅の関係で紹介できなかった、別の概念を導入しなければ説明がつかない問題であり、より精密な議論が必要である。

第2に、ポジショナリティとそれに付随する責任を、どのように個人の水準で定式化するかという問題である。ポジショナリティは、短かい期間においては不変的であり、またそのポジショナリティを共有する個人にとってみれば、それを個人的な意思で変更することはきわめて難しい問題でもある。それがポジショナリティと「属性反応的アイデンティティ」が混同されやすい理由でもあった。しかし本稿（2-4）でも論じたように、ポジショナリティは、中長期的には「能動選択的アイデンティティ」の集合的变化によって変革可能なものである。しかしポジショナリティの問題は、個人レベルから見た場合、集合的で構造的に映るだろうし、その構造を変革することは困難に感じることもあるだろう。その結果、ポジショナリティは不変的で、所与のものとして前提化されてしまう可能性がある。またポジショナリティが構造的なものであることと、この「不変性」の印象が重なって、個人的な責任に属さないものとして捉えられ、結局のところ、ポジショナリティの変革は、構造的な外部の問題として、個人において免責意識が働く可能性もある。

これらのプロセスは、すべて論理的には誤りではあるが、個人の意識のなかで、十分に起こりうる感情的プロセスである。したがって、ポジショナリティへの責任は、それが集合的・集团的・構造的に存在しているにせよ、あくまでも各個人において、個人的な責任として分担・分有されるべきものであることを、論理的に明らかにする必要がある。その議論の一端は池田（2016b）において行ったが、さらに精緻化された論理が必要であ

る。

最後に3つめの課題は、本稿の最後において論じた問題である。「ボリス」的な権力保持者においては、ポジショナリティの顕在化が現出させる「不和」を経験した際に、その「不和」を「間違い（トール）」として黙殺し、現存する「ボリス」の秩序の維持・強化に向かうのか、それとも、その「不和」をさらに拡大・深化させ、現存する「ボリス」の秩序を刷新し、新たな自己の発見、コミュニケーションの開拓、感性の獲得、「ロゴス」の構築へと向かうのか、という選択が迫られることになる。

ポジショナリティが提起する「不和」は、既存の「ボリス」的秩序に確実にヒビを入れるが、しかし「不和」の段階では未だヒビにすぎず、既存の「ボリス」の優位性・圧倒性は継続している状態である。すでに「ボリス」的秩序において「分け前」を得ている者が、あえて一旦その「分け前」を手放し、新たな「感性的なものの布置」に賛同するためには、どのような論理的必然性が求められるのか、その詳細を検討することが重要である。

なぜなら、「政治」を拡大させ、「不和」を深化させるためには、「ボリス」の内側にいる者たちのポジショナリティを顕在化させ、その変革を行う必要があり、そのためには、ポジショナリティの変革と新たな秩序が、なぜ必要で、新たに何をもちたすのかを明示することが求められるからである。それなくしては、「不和」は「間違い（トール）」として看過され、隠蔽され、自らの特権者としてのポジショナリティすら認めない態度が継続してしまうだろう。

この論点には、一種の投企的契機、実存性の領域の問題がかかわっていると思われる。重要な論点であるので、腰を据えて検討する必要があるだろう。

以上、ポジショナリティを有効な概念として作動させるための今後の課題を提起して、とりあえずの小括としたい。

注

- 1) ポジショナリティの概念化については、池田(2016b)に詳しいので参照されたい。
- 2) この論理の置き換えについては、池田(2014)において詳しく論じたので参照されたい。
- 3) この点に関連して、反基地運動の場で、「私は日本人で申しわけない。沖縄の皆さんに謝ります」と、頭を下げて謝罪した日本人の逸話を耳にしたことがある。この逸話も、怒りとは方向性こそ異なるものの、同種の混同の結果である。この日本人は、日本人としてのポジショナリティとその責任を批判されているのに、日本人であること（属性反应的アイデンティティ）を批判されていると解釈し、その「属性反应的アイデンティティ」を保持していることを謝ったのである。これでは謝られた沖縄人も面食らっただろう。のみならず、この逸話が問題なのは、批判されていることが「属性反应的アイデンティティ」のみであると解釈したために、謝罪した日本人はそれ以上の対話の可能性を閉ざしてしまった点にある。換言すれば、「能動選択的アイデンティティ」に基づく対話と変革可能性を、沖縄人に対して遮断してしまったのである。
- 4) 何度も繰り返すが、このような感覚自体、私もかつて経験したものである。個人的な原罪、あるいは個人の選択としてここにいることを批判されている。それは個人的なアイデンティティへの攻撃であり、不当な批判である、と。しかしその過程でも、不思議に感じ、腑に落ちないことがあった。それは、つい今しがたまで私の在りようを批判していた沖縄人たちが、さりげなく料理を取り分けてくれたり、お酒を注いでくれたり、基地問題以外の話題ではにこやかに十分な個人的やさしさをもって接してくれていることであった。この状況にはひどく混乱した記憶がある。これが「沖縄のやさしさ」なのか、それともこの人たちはわずか10分前に私を「責めて」い

たことをもう忘れたのか。しかし、そのいずれでもないことがわかってくると、どうやら、私自身が自分自身の選択として沖縄や基地問題にかかわっていること自体が批判されているのではないことに気がついた。私自身の個人的信条や在りかたが直接の批判の対象となっているのではないらしい、と感じ始めたことが、ポジショナリティの問題を考える一つのきっかけとなった。

- 5) このポジショナリティの可変性については、ポジショナリティの概念化の嚆矢となったリンダ・アルコフ (Linda Alcoff) も、女性とジェンダー論の関係を論じる中で、「女性とは、フェミニストの政治が出現させた一つのポジションなのだ。このように考えれば、「女性」であることは、動的な歴史的な文脈のなかにポジションを位置づけることであり、このポジションを解釈し、その文脈を変えることも可能にするだろう。」と、ポジショナリティとポジションの変革性について言及している (Alcoff, 2006: 149)。
- 6) この点で、昨年度の論考で引用した石田雄の文章は典型例である。政治学者である石田は、沖縄人である知念ウシとの公開往復書簡において、知念による米軍基地の日本への引き取り要求に対して、「もし「日本人の責任」として基地を引き取ることを約束したら、例えば東京都民としては東京都に基地を招致する運動をする義務が生まれます。これは現実には難しいだけではなく、私としては砂川、王子野戦病院の闘争を否定することになり、認めることはできません。」と返答している (石田, 2014: 211-212)。ここで衝突しているのは、日本人としてのポジショナリティがもたらす基地引き取り運動という義務と、石田自身の個人的経験の蓄積として反基地の立場を貫いてきたという「能動選択的アイデンティティ」である。そのうえで、この局面において「認めることはでき」ないと宣言する石田の態度は、ポジショナリティへの理解の拒否と、ポジショナリティによって発生する集団的な責

任 (の分有) の否認という、明確に能動的な選択といえる (ちなみに、「引き取ること」は「招致」とは異なり、この点でも石田の立論にはすり替えがあり、選択的にポジショナリティを無視する態度と呼応している)。なお、詳細な分析は池田 (2014: 26-27) を参照されたい。

- 7) このような見解として、2015年10月24日付け読売新聞 (大阪版13面) に掲載された読者の声 (京都市の72歳の男性) が典型的である。「翁長氏の移設抵抗やり過ぎでは」と題された投稿では、以下のように沖縄人の抵抗への違和感が語られている。

沖縄県の米軍普天間飛行場 (宜野湾市) の移設計画を巡り、翁長雄志知事が移設先である同県名護市辺野古沿岸部の埋め立て承認を取り消し、国と県の対立がさらに強まった。翁長知事は9月、国連人権理事会でもこの問題について演説したが、これらはやり過ぎではないだろうか。／そもそも、安全保障の当事者は国だと考える。それなのに、基地に関する決定事項に地方自治体のトップがここまで激しく抵抗することに違和感を覚える。／基地など日米軍専用施設の70%以上がある沖縄県民の不安はわかる。だが、政府も長い時間をかけて協議するなど努力している。普天間の危険性除去のためにも移設を進めなければ、将来に禍根を残すと思う。

この見解の要諦は、地方自治体の長 (翁長知事) が国連で演説したり、安全保障の問題にかかわる主体として登場することへの違和感である。沖縄人が自らの生活を脅かす暴力について、その行く末の決定にかかわる主体として、日本人に認識されていない状況が顕わになった言説であり、まさしくランシエールが説く「不和」が顕在化した場面として、「禍根を残す」といった恫喝的な響きを含む表現が沖縄人に対して投げかけられたことと共

に) 記録しておく価値があると思う。

- 8) 念のため付記すれば、そのことは、沖縄人においてしばしばおこりうる、たとえば運動の過程でかかわる日本人個人への、個人的な好意、個人的に共感する部分、すなわち「能動選択的アイデンティティ」の善良さに接することを通じて、その日本人個人の「能動選択的アイデンティティ」と日本人のポジショナリティを混同してしまう、といった事態とは別の次元の問題である。

参考文献 (In alphabetical order)

- Alcoff, Linda. M, 2006 *Visible Identities: Race, Gender, and the Self*, Oxford University Press.
- 池田 緑 2014「沖縄と日本における社会意識のポリテクスー“平和”言説を中心に」『社会情報学研究 (大妻女子大学紀要-社会情報系-)』23: 15-37
- 池田 緑 2016a「「沖縄問題」における免責化言説とポジショナリティの錯乱」『解放社会学研究』29 (予定稿)
- 池田 緑 2016b「ポジショナリティ・ポリテクス序説」『法学研究 (慶應義塾大学法学研究会紀要)』89(2) (予定稿)
- 石田 雄 2014「知念さんの御批判への応答」知念ウシ・與儀秀武・桃原一彦・赤嶺ゆかり『沖縄、脱植民地への胎動』未来社: 211-220
- 仲村清司, 宮台真司 2014『これが沖縄の生きる道』亜紀書房
- 野村浩也 2005『無意識の植民主義-日本人の米軍基地と沖縄人』御茶の水書房
- Rancière, Jacques, 1995 *LA MÉSENTENTE*, Éditions Galilée, (松葉耕一/大森秀臣/藤江成夫訳 2005『不和あるいは了解なき了解-政治の哲学は可能か』インスクリプト)
- Rancière, Jacques, 2005 *La haine de la démocratie, LA FABRIQUE*, (松葉耕一訳 2008『民主主義への憎悪』インスクリプト)
- Rancière, Jacques, 2011 *La methode de l'égalité*, Éditions Bayard, (市田良彦, 上尾真道, 信友健志, 箱田徹訳 2014『平等の方法』航思社)
- 新城郁夫 2014「「掟の門前」に座り込む人々-非暴力抵抗における「沖縄」という回路」『現代思想』42(15): 222-232
- Young, Iris. Marion, 2011, *Responsibility for Justice*, Oxford University Press, (岡野八代, 池田直子訳, 2014『正義への責任』岩波書店)

付記 1

本稿を考えるにあたり、桃原一彦氏、野村浩也氏、高橋哲哉氏、玉城夏子氏、から多大な示唆をいただいた。記して感謝したい。とくに桃原一彦氏からは、ランシエールの議論をめぐり多くの示唆を得た。

付記 2

本研究の一部は、日本学術振興会科学研究費、基盤研究(C)(採択番号 25380694)によってなされた。

Confusion of Positionality and Possibilities of “Dialogue” and “Politique”: From the Case of Okinawa and Japan

MIDORI IKEDA

School of Social Information Studies, Otsuma Women's University

Abstract

In colonial relationships, confusion of positionality and identity often happens. This confusion leads people to two more problems, one is confusion of positionality and “Attributive/Reactive Identity”, the other is it of “Attributive/Reactive Identity” and “Active/Selective Identity”. These confusions are able to be theorized by Jacques Rancière’s, concepts “police” and “politique”. “Police (it comes from ancient Greek)” means reorganization of the order of the community, and “Politique (it comes from French)” means intervention from the outside to “police”. At same time, I pointed it out using Rancière’s Concepts “mésentente (it means discordance)” in the possibility of reorganization of new “police” order. In this paper, I studied the above-mentioned issues using the case of Okinawa-Japan Relations.

Key Words (キーワード)

Positionality (ポジショナリティ), “Attributive/Reactive Identity” (「属性反応的アイデンティティ」), “Active/Selective Identity” (「能動選択的アイデンティティ」), police (ポリス), politique (政治), mésentente (不和)